

布ナプキンプロジェクトの調査結果

1. はじめに

布ナプキンプロジェクトは、ウガンダのパリサ県にて 12 歳～17 歳の女子を対象に以下 2 校の小学校（The Canan Nursery & Junior Academy School と Opadoi P/S in the Agule County of the Pallisa district）にて行った。

今回のプロジェクト（布ナプキン配布、衛生トレーニング、およびアンケート実施）は 2015 年 6 月に実施し、4 か月後の 2015 年 10 月にプロジェクトの効果を図るために追跡調査（アンケート）を実施した。今回のプロジェクトは日本の多くの方からの寄付により実施することができた。寄付金は、再利用可能な布ナプキン（および下着）購入費、生理における衛生教育のトレーニング開催費、また配布後の調査費に充てられた。布ナプキンおよび下着は学校の女子生徒、すでに中退した女子たちへ配布した。寄付金は上記の活動費に加え、プロジェクト実施前後における女子生徒へのアンケートの集計やデータ入力などにも充てられた。今回のプロジェクトにおけるインパクト（効果）と調査結果は以下にて記述している。

2. 背景

布ナプキン配布およびワークショップの実施前に、2015 年 4 月にパリサ県にて学校を中退する女子たちについて事前調査を行った。多くの女子生徒にとって、両親の経済力がないために生理用ナプキンを購入することができず、生理用品がないことが中退に至ってしまう要因になることがわかった。最初の事前調査では、パリサ県の Chair Person(県知事)、学校の先生、生徒（男女）、コミュニティの長老、生徒の両親など様々なエリアの人々を対象にインタビューした。発展途上国の多くの地域では、女子の生理は、初等教育の達成にネガティブな影響を及ぼすことで知られている。清潔な衛生施設（トイレや手洗い場所）の欠如、学校までの長距離通学、不十分な性教育、生理や衛生管理などに関する知識の不足、生理用品が購入できないことによる学校の欠席などが、学校に通う女子生徒が直面する課題となっている。このことが、生理がくる年頃の

女子生徒を中退に至らせてしまう。同じ年頃の男子生徒と比べても、女子生徒の中退が多いことから推測できる。

教育を受けることは、就職の機会を増やし、女性の能力が低いという偏見をなくすことにも繋がると言われている。上記のような様々な要因により、女子学生の出席率を妨げ十分な教育を受けることができていると、将来の展望がとても限定的なものになってしまう。しかしながら、女性の経済的自立を分析する際に、女子生徒のようにまだ生計を立てるに至らない若い年代の女子については考慮されず、彼女たちが抱える問題の多くはいつも軽視されてしまう。このような理由から、このプロジェクトは女子生徒の抱える問題に取り組み、学校に通う女子生徒の生理による負担を減らし、性に関する知識やジェンダー意識の向上を目的とした。若い世代の女子たちがしっかりとした教育を享受できる基盤を作ることで、女性のエンパワーメントに繋がると考えている。

3. 分析結果

A. 布ナプキン配布によるウガンダの農村地域の女子たちの負担軽減

日本からの寄付による支援を受け、生理の年頃の女子たちに再利用可能な布ナプキンを配布し、布ナプキンの使用法および洗い方などの衛生に関する指導をした。支援を受けた生徒たちの詳細と利点は以下である。

図 1 は、布ナプキンを配布した少女たちの各学年における年齢別の人数である。調査対象者は生理が始まった女子たちで、調査は小学校（対象学年は P1～P7。ウガンダの小学校は7年制である）で行われ、図 1 にみられるように、12 歳～16 歳が主な対象となっている。

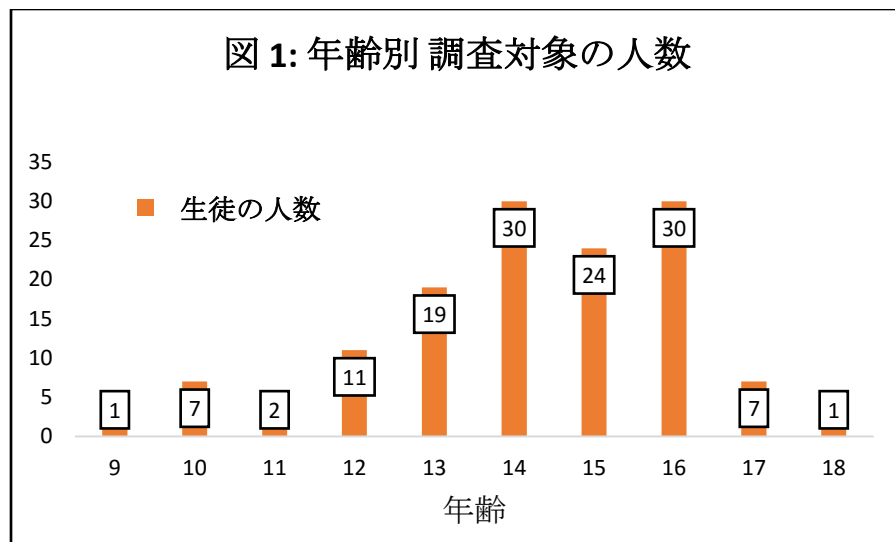


図 2 は、初経を経験した年齢である。女子生徒のうち約 74%は 12 歳～14 歳で初経が始まり、10%は 12 歳未満から始まっている。また、15 歳～16 歳で経験した生徒は約 16%である。

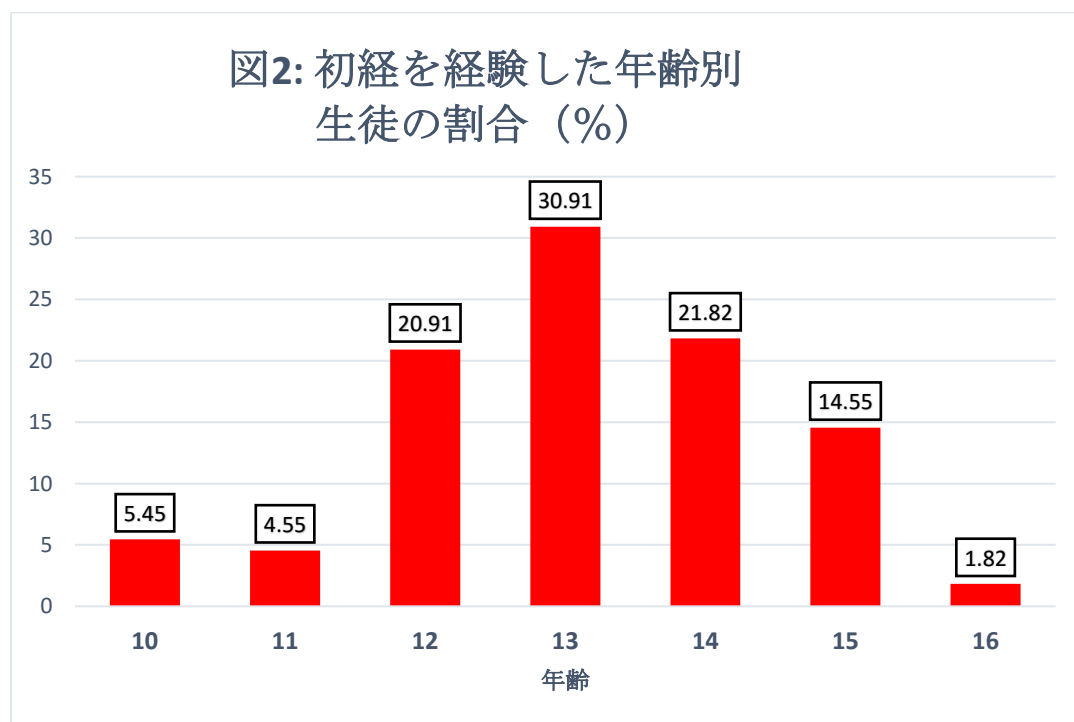


表 1 は学年ごとの支援を受けた生徒数と割合 (%) である。ウガンダでは進級試験に合格すると上のクラスに上がるという仕組みのため、クラスに在籍する生徒の年齢はバラバラである。今回調査をした対象生徒 (生理になる年齢) のほとんどが P6、続いて P7、そして P5 と続いている。P4 からは 8 名、P3 からは 1 名だった。ここからわかることは、初経を経験する生徒の多くが P6、P7 に在籍しているため、上位クラス (P6、P7) の生徒の中退率が高い理由の一つが生理だと推測できる。

表 1: 各クラス (レベルごと) の生徒数

クラス	生徒数	%
P.3 低レベル	1	0.75
P.4	8	6.02
P.5	34	25.56
P.6	49	36.84
P.7 高レベル	41	30.83
合計%		100

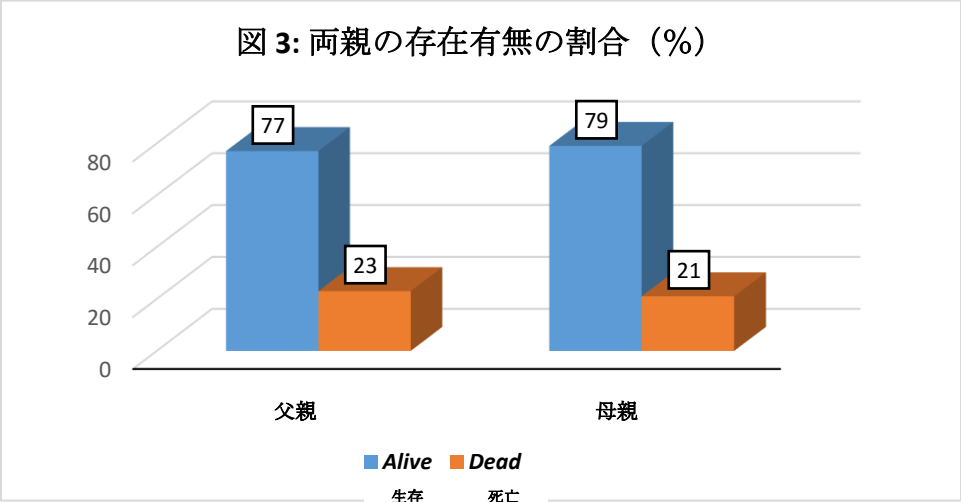
上のクラス(=初経の年齢)になるほど中退率が高くなる

表 2 は、支援をした少女たちの平均的な生活環境を表している。生徒のうち 70% は自宅から徒歩 1 時間近くかけて学校に通っており、1 家族に 7 人の子ども、1 日 2 食というのが平均的である。

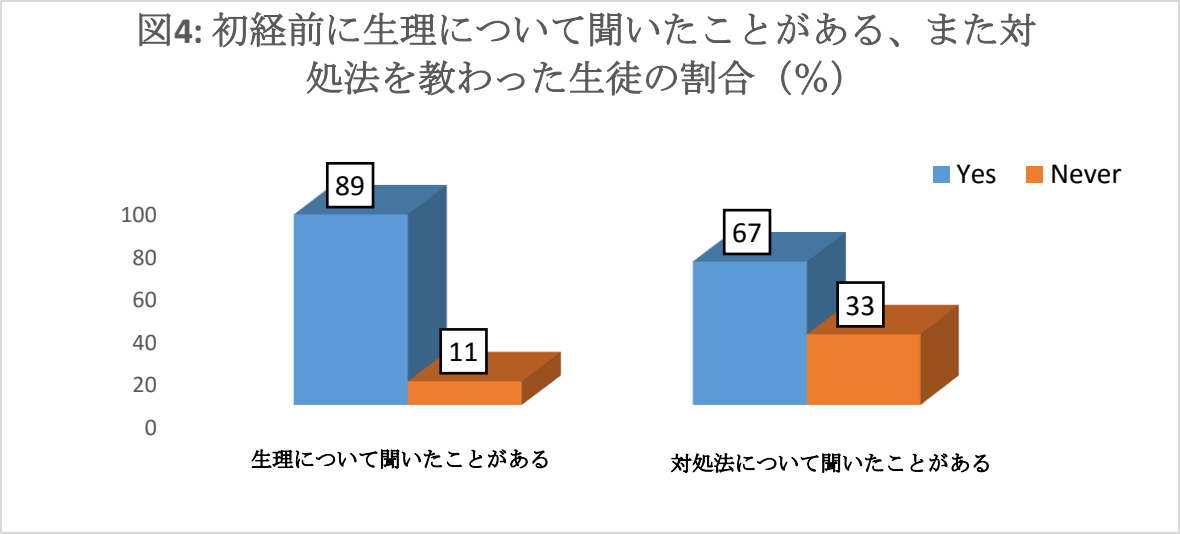
表 2: 生徒の生活環境

様々な状況	平均
学校の寮にいる割合	30%
学校までかかる時間	57 分
一日の食事の回数	2.1 回
両親と同居している生徒の割合	79%
家族の人数	9 名
両親がいない場合、何人と住んでいるか	11 名
同居している子どもの人数	7 名

図 3 は、両親が存在する生徒の割合である。父親が死亡している生徒の割合は 23%、母親が死亡している割合は 21%である。この結果から、生徒のほぼ 2 割は片親、もしくは孤児であると言える。



両親がそろっていない生徒が多い中、性教育や生理についてどのように対処したのか質問した。図 4 は、事前（初経の前）に生理について聞いたことがあるか、どのように対処するのかを教わったかどうかを示している。89%は生理について聞いたことはあるが、11%は知らなかったという回答である。また、33%は初経前に生理時の対処法を知らなかったという回答である。



今回の調査対象の女子生徒たちに、生理について誰と情報共有したかを図5で聞いたところ、「母親」からが68%、「兄弟か姉妹」からが31%だが、「学校の先生」からはたった2%である。学校教育の中に、生理に関する授業がきちんと取り入れられていないということが分かる。

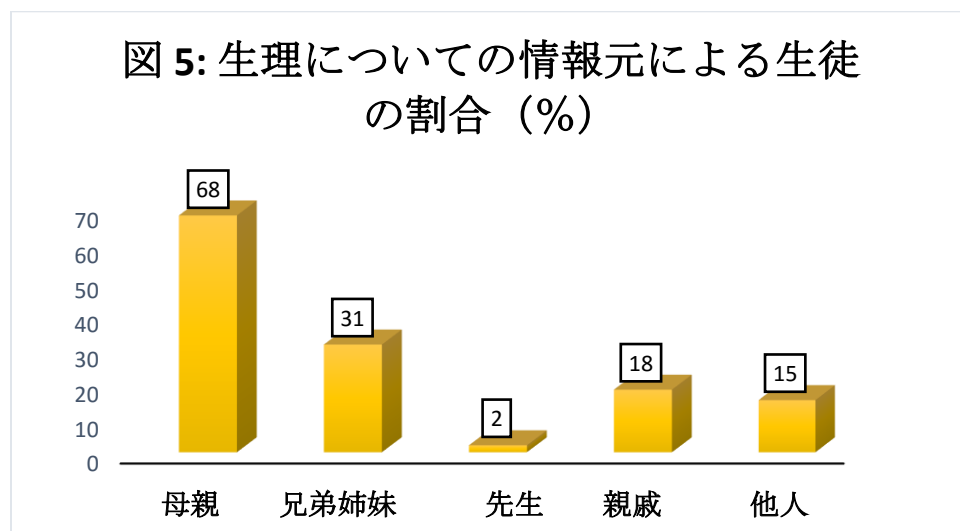
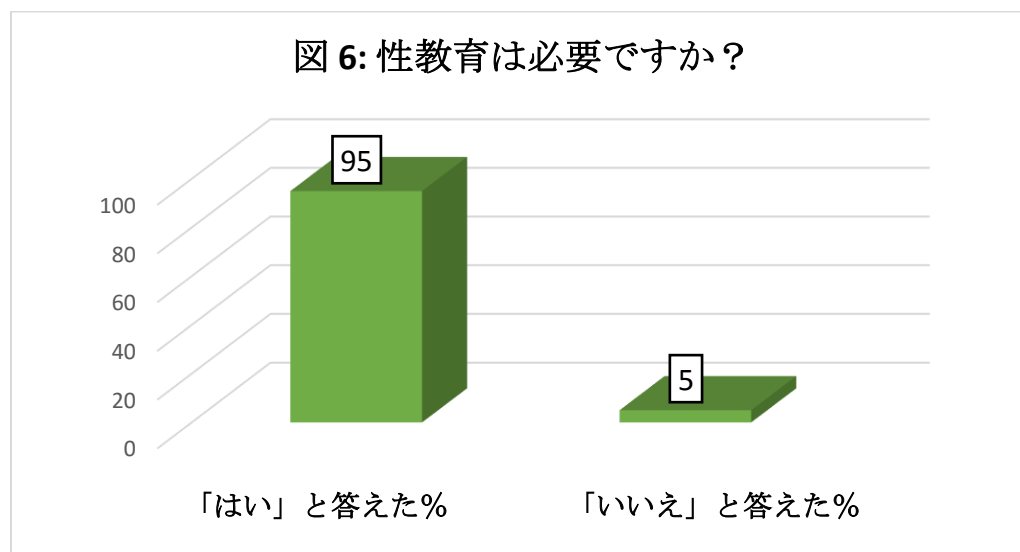


図6では、性教育は必要だと思うかという問いに対し、95%もの生徒が必要と感じているとの結果が出た。



性教育において何を学びたいかという問いに対し、図 7 では「生理」についてが 67%、「保健・衛生」が 48%、その他「体の変化」、「性」、「青年期（生活習慣）」について知りたいとのことだった。

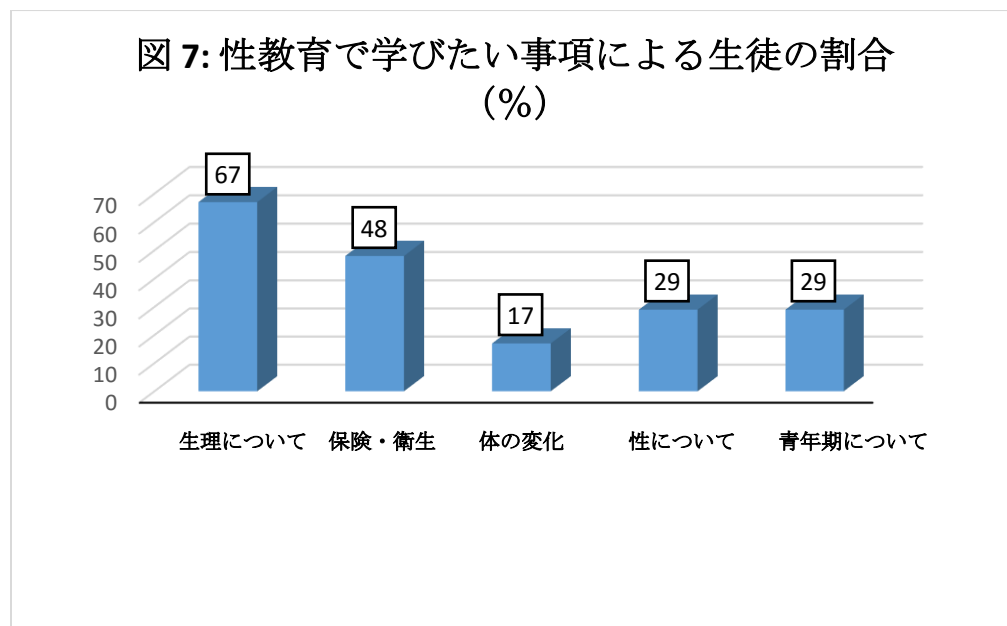


図 8 は「生理用ナプキン」というものを知っているかについて、2015 年 6 月に実施したプロジェクト前後の変化を調べた。実施前は生理用ナプキンについて知っている生徒は 75%、実施後の調査では 96%が知っていると答え、21% (75%→96%) の上昇がみられた。

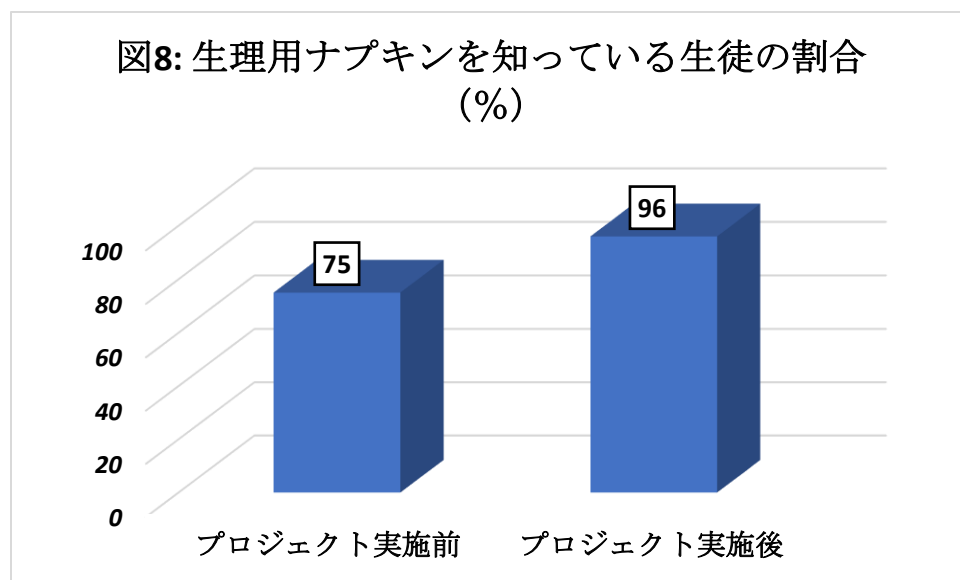


図 9 において、生理時のナプキン使用についても変化が見られた。プロジェクト実施前は生理用ナプキンを使用している生徒の割合が 38%だったが、実施後は 60%になった。したがって、ナプキン使用率が 22% (38%→60%) も上昇した。

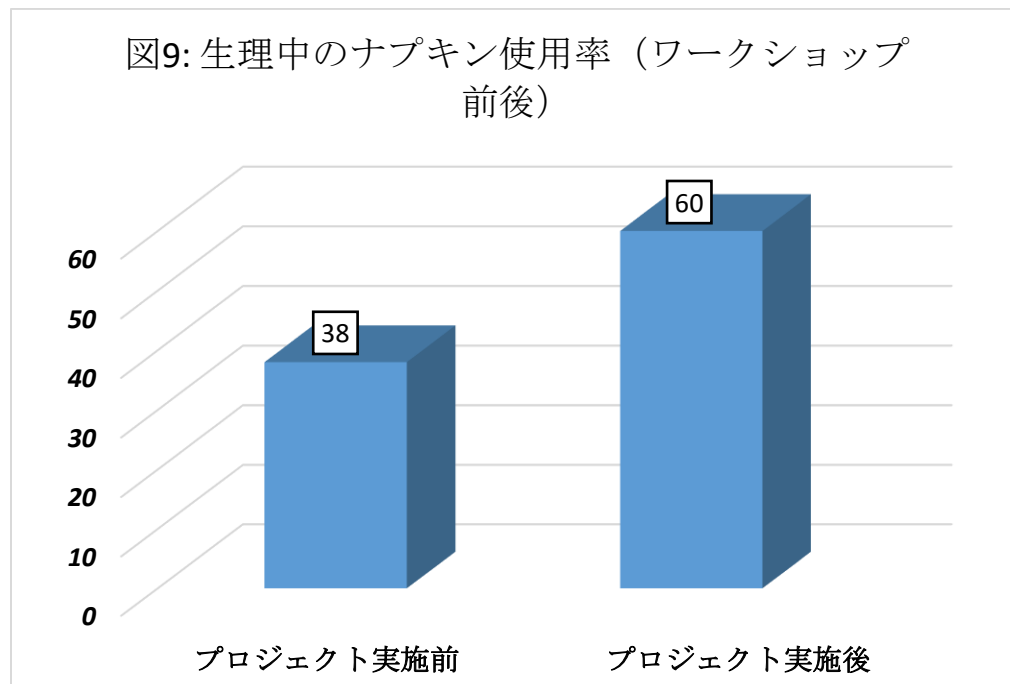


図 10 で生理用ナプキンを使用していない生徒を対象に理由を聞いたところ、71%が「生理用ナプキンを買うお金がない」、17%が「生理用ナプキンについて知らない」、12%のその他では「他の代用品で何とかできるので特に必要ない」と答えた生徒もいる。

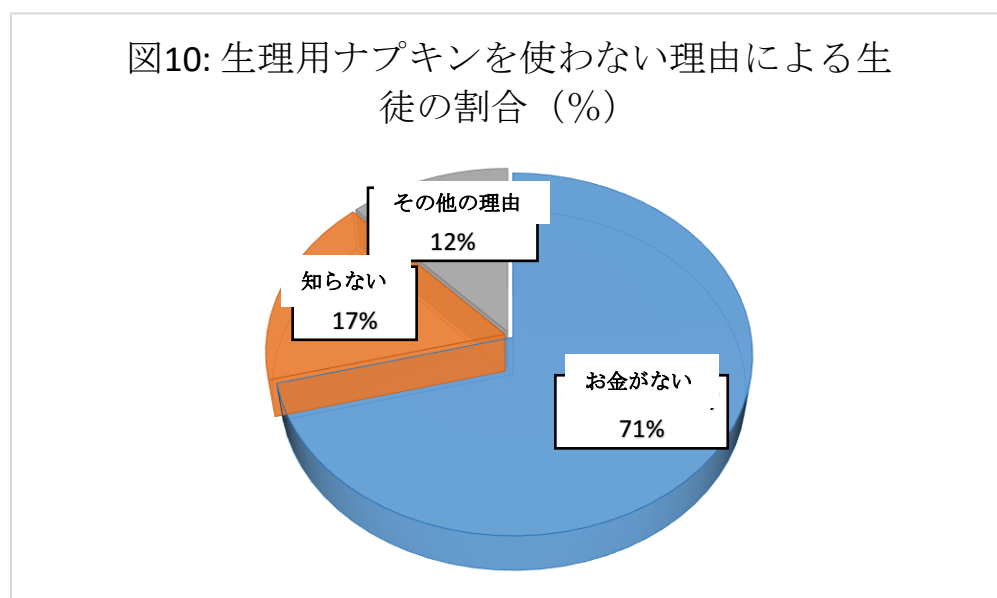


図 11 は生理用ナプキンを使用しない生徒たちがどう対処しているのか聞いたところ、73%が下着、67%はコットンやウール素材のもの、55%は古着、33%はトイレトペーパーで代用していると回答した。しかし、代用品でも清潔なものを使っていなければ、感染の危険にさらされる。

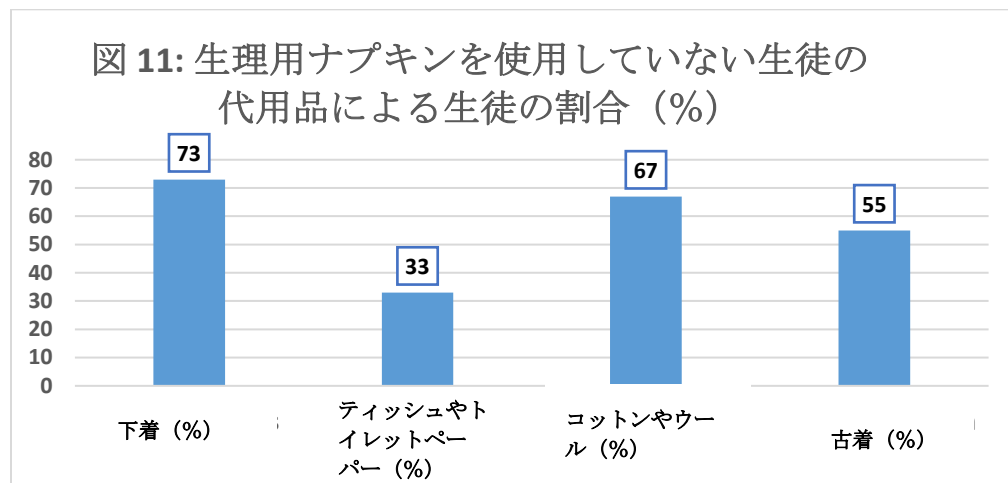
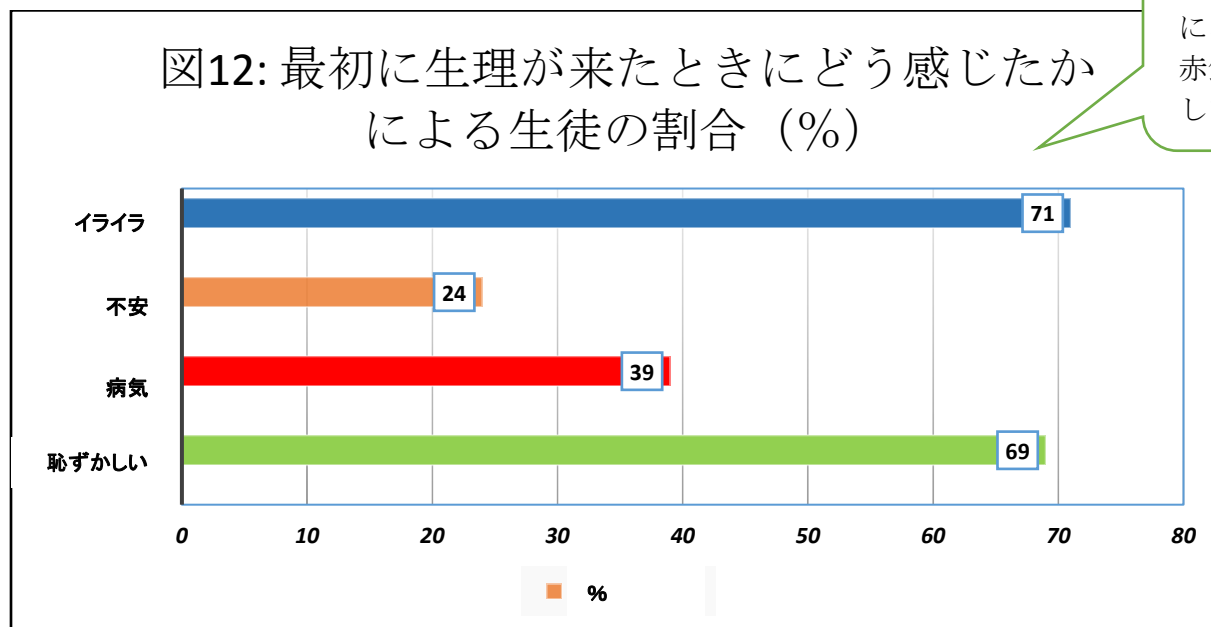


図 12 では初めて生理になったときにどんな気持ちになったか聞いたところ、70%近くが「恥ずかしい」や「イライラした」とのことだった。このような気持ちになるのは、やはり性教育を受けておらず、さらに同級生にからかわれることからすると推測される。他には40%が「病気だと思った」24%が「不安になった」と回答した。



日本では生理になったらお赤飯でお祝いしますよね!

図 13 は、生理中にかからかわれたことがあるかという問いについて、86%が「はい」と回答した。これだけ多くの女子生徒がかからかわれた経験を持っていることから、学校も社会もいかに性教育が不足しているかが分かる。

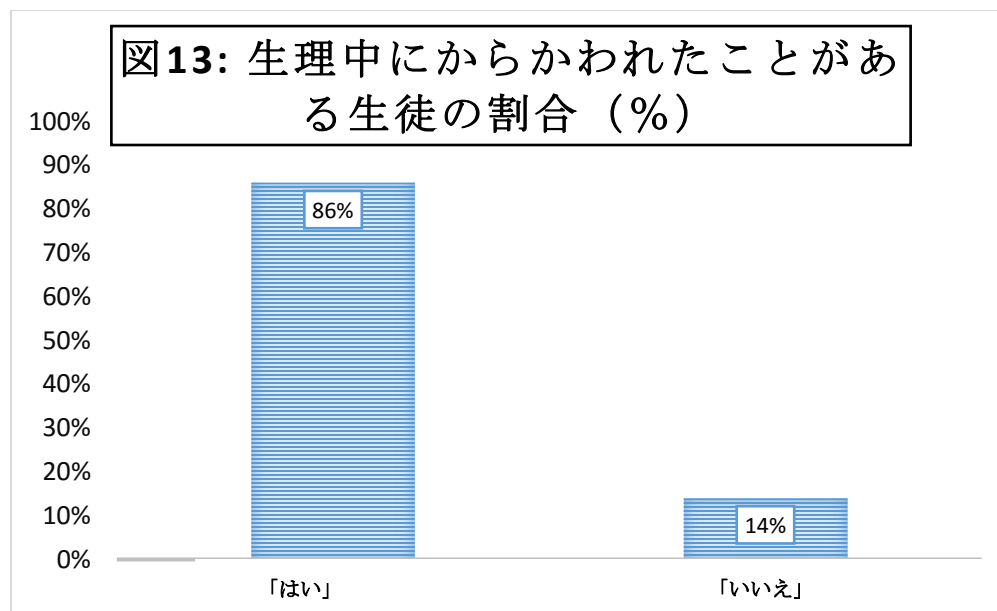
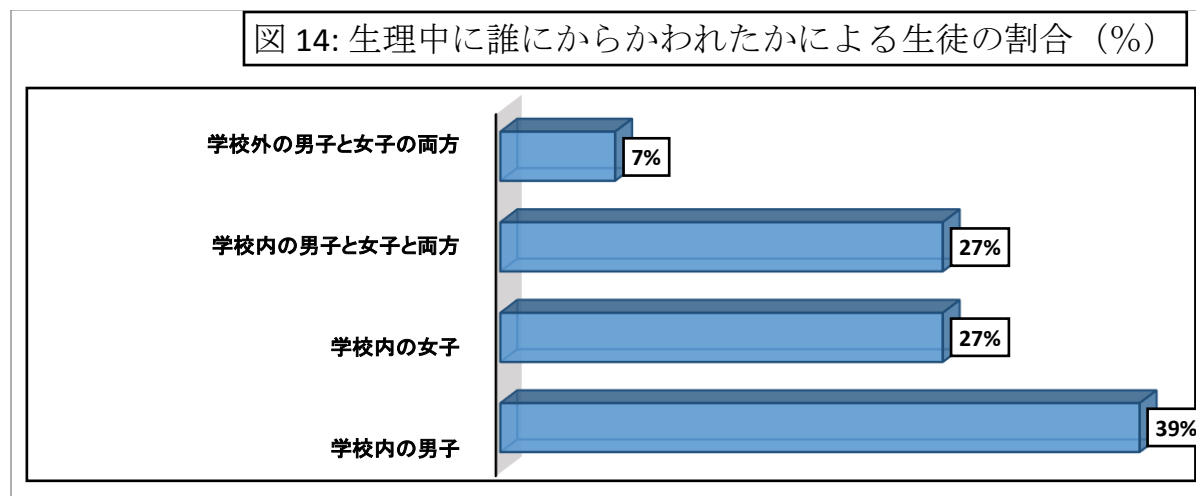


図 14 では、生理中に誰にかからかわれたかを聞いたところ、同じ学校の男子にかからかわれた女子生徒が 39%いる一方、同じ学校に通う同性である女子にかからかわれたことがある生徒が 27%もいるのは意外な結果であった。



生理中に学校に通う女子生徒にどのような影響があるのかを調べるために、図 15 で生理中の欠席率、1 か月間のうち生理で学校を休む日数について質問した。布ナプキン配

布前後で調べたところ、布ナプキン配布前（オレンジ）、いわゆる布ナプキンを所持していないときと比べると、布ナプキンの配布後（青）、布ナプキンを所持してからの欠席率が明らかに減少している。この図からわかることは、例えば布ナプキンを使用していない生徒の68%は3日以上も欠席している一方、布ナプキンを所持している生徒で3日以上欠席は25%しかいない。布ナプキンを所持することにより、生理中に学校を休まずに行けることが分かり、再利用可能な布ナプキン配布によって、出席率に大きく効果があったと言える。

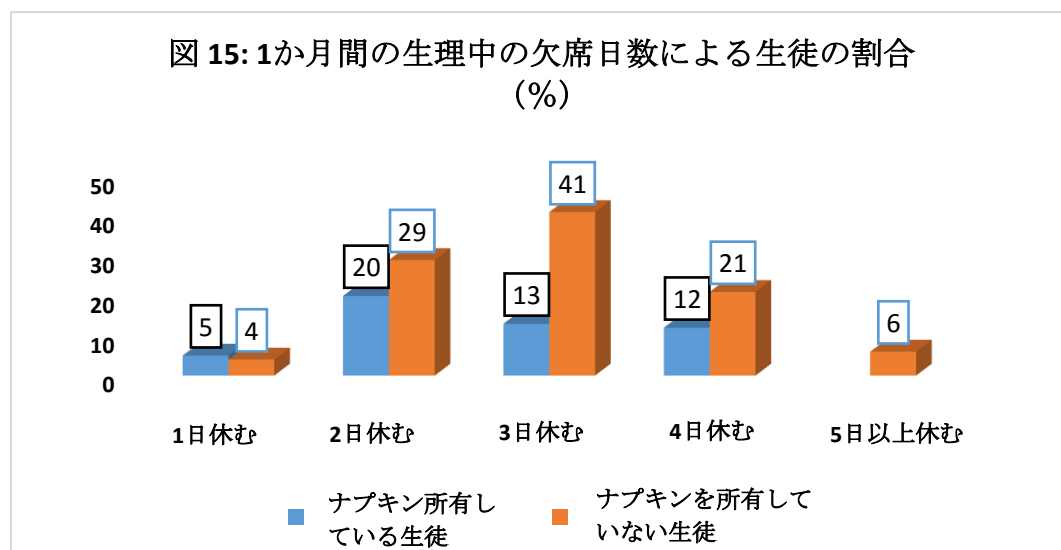


図 16 は、生理中に学校に行かない理由を聞いた。49%は気分が悪い（病気）、34%は生理中に学校へいくのは恥ずかしい、4%は親から学校に行かなくてよいと言われたと回答した。

図 16: 生理中に欠席した理由による徒の割合 (%)

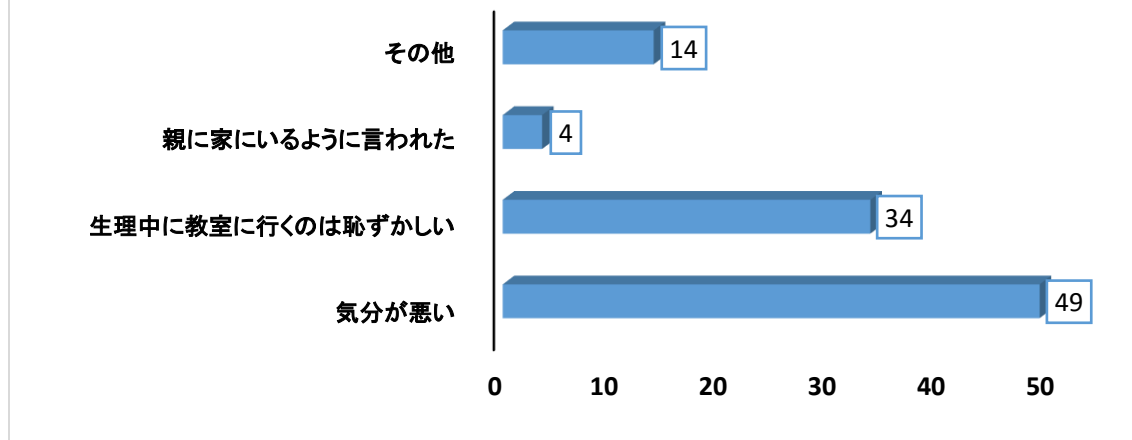


図 17 では、生理中に生徒が抱える課題（困難）を調査した。生理中に学校を欠席し、試験を受けることができなかつたことがある生徒は 45%であり、そのうち 89%の生徒は生理用ナプキンがないことが一番の原因だと答えた。

図 17: 生理中に試験を受けることができなかつた、また生理用ナプキンがないことが影響したと答えた生徒の割合 (%)

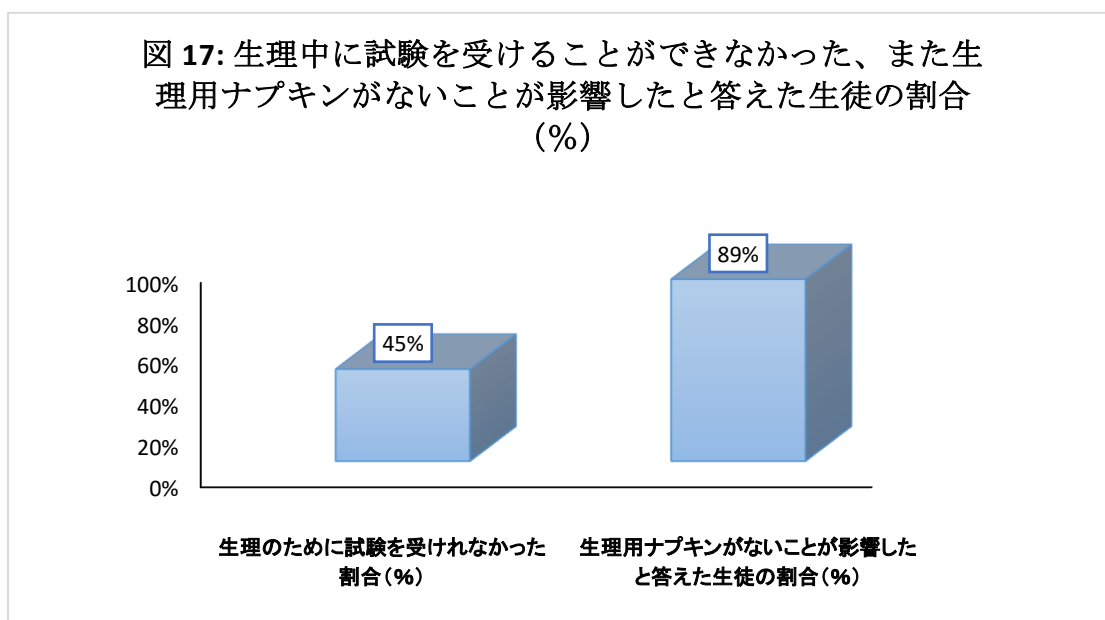


表 3 は、生理用ナプキン配布前後における、生徒の成績結果を表している。英語と数学（この二科目は成績として数値に表れやすいことで調査対象として選択した）の成績によると、生理用ナプキン配布後の学期成績にかなりの上昇がみられる。例えば、1 学期の女子生徒の平均点は数学が 7.4、英語が 7 だったが、ナプキン配布後の成績はそれぞ

れ 4.9 と 4.4 に上昇した。ウガンダの教育のシステムは一番良くて「1」下がって最下位が「9」となる。従って、成績が「7」から「4」の数字の変化は、成績が非常に上がったことを表している。

表 3: 生理用ナプキン配布前後における成績の平均点

平均点	ナプキン配布前	ナプキン配布後
数学	7.4	4.9
英語	7	4.4

備考: 成績が一番上が 1→9 が最下位となる。

4. 結論

今回の調査結果から、生理用ナプキン配布とプロジェクト実施による効果（インパクト）は、生理用ナプキンについての知識の向上、生理用ナプキンの使用率、学校の出席率、数学と英語の成績の上昇として結果が出た。

この調査から、70%ほどの女子生徒（30%は寮）の置かれている環境の特長は、家族と一緒に住んでおり、自宅から1時間かけて通学している。そのうちの多くは生理用ナプキンを買えるだけの余裕がないと答えた。この状況では、生理中にナプキンもない状態で1時間近く歩いて通学することを余儀なくされ、結局は学校を欠席してしまうことになる。

今回行った性教育に関する調査では、95%の女子生徒は性教育が必要だと答え、そのうち67%は生理について正しく学びたいと答えた。また、プロジェクト実施前後でみられた変化の一つは調査実施前と比べると、生理用ナプキンについて知ったという生徒は22%も上昇した。従って、生理に関する知識や生理用ナプキンの正しい使用方法を知ることが非常に重要であることが分かる。図9、10、11を見ても、62%が貧困のため生理用品を購入できずナプキンを使用していないと回答し、より安いもので代用するため下着やコットンで代用している。しかし、不衛生なものによる感染の可能性は免れない。

そのため、この生理用ナプキン配布後に 22%の生徒がナプキンを使用するようになったのは、そのような感染のリスクの減少に寄与したと言える。

また、多くの生徒が生理になると恥ずかしい思いやイライラすると答えたが、おそらく同級生にからかわれることが影響していると思われる。86%もの生徒が生理中に同級生にからかわれたことがあると答え、さらに驚いた結果は、からかうのは男子だけでなく、女子もいたことだ。男女共に生理に関する正しい知識や意識の向上が必要である。

学校の成績についても、生理中に学校を休み、試験を受けられないことが、成績に大きく影響することが明らかになった。生理用品配布後には数学や英語の成績が上昇したことからも影響の大きさがわかる。

結論として、生理用ナプキンがないために同級生にからかわれたり、不衛生なものを代用することは、生理中の女子生徒にとって非常に酷な状況であり、学校を欠席したり、中退してしまう大きな要因である。そのような状況において私たちが行った再利用可能な布ナプキン配布後、学校の出席率や成績の向上がみられたことはプロジェクトの効果があったと言える。今回の調査結果により、生理に関する正しい知識や衛生教育が男女ともに非常に重要であることが明らかになった。

以上